# 命を燃やしてつくるべきもの

karinomaki

## はじめに

「炎」は、人の大切なものを燃やしてしまう、恐ろしいものかもしれません。しかし、本当に大切なものを、炎は決して奪うことはありません。人にとって本当に大切なものは、炎が燃やすことのできない、形のないものだからです。

形のあるもの（人の体や物）が包んでいる、形のないもの（精神的なもの）は、炎によって浄められ、天空の中に再生すると私は考えています。だから、日本では、亡くなった人を火葬にするのだと思います。炎は、考え方によっては、決して恐ろしいものではないのです。人は亡くなると同時に魂が抜けてしまうのですが、燃やすことは再生の儀式のようなものだと思います。この儀式でなく、土葬にする国もありますが、お葬式をするということそのものが、魂を浄める儀式であるのだと思います。

どうして物を燃やすのでしょうか。お守りにも、役目が終わった後、焚き上げという儀式があります。まるで、この世界の苦しみを吸い取ってくれたお守りを、燃やすことで浄化するかのようです。私は、この世界で生きる意味を、炎の意味から探ってみたくてこの文章を書き始めました。

## 炎と哲学の課題

人にとって最も追求するべきものが「幸せな人生」なら、自分が向き合うべき問題から逃れて、楽しいことをかき集めて生きていけばいいと思うのですが、哲学が追求するものは、「幸せ」とは少し違うと私は思います。哲学は、「向き合う」ことのためにあるのです。自分の与えられた課題と向き合い続け、例えそれが解決しなくても、人生を燃焼しつくしてこそ、本当の永遠がつくれるのだと思うのです。人生を燃焼することの意味と、そのことで何がもたらされるかを、追求してみたいのです。

## 炎を利用する

しかし、本当に耐えられないほどのドロドロの中に身をおく必要もありません。
本当にドロドロの中にいては、炎に焼きつくされてしまいます。ドロドロとは、上手な向き合い方があるはずです。少しは逃げてもいいのです。
「心頭滅却すれば火もまた涼し」ということわざがあります。どんなつらいことも心の持ちようで強く乗り越えられるという意味です。炎（火）は恐ろしいものかもしれませんが、これを、自分が使うため（例えばご飯を炊いたり）に利用すれば、火は便利なものであり、文明が発達したのも、火のおかげなのです。同じように、ドロドロしたものを燃やすという、火を利用するイメージで、哲学に火を使ってみたいと思います。

## 失うことと再生

大切なものを作ると、失うことが怖くなるので、あえて人生に大切なものを作らないという人が存在すると思います。炎を恐れることもそれと同じことです。私はある時、人生がいやになって、書いていた日記を全部燃やしてしまったことがあります。今思うともったいないことだったのですが、そのことは、私に、自分にとって本当に大切なものは何かを考えさせました。その時は不思議と、燃やした日記に未練はありませんでした。
私は、大切なものは自分の中にあるのだと気がつきました。自分の中の宝物を外に表していくことこそが、人生の宝だと思いました。そう気がついた私は、体の中から力がわいてくるのを感じ、文章を書き始めました。それまでの、苦しみをぶつけた日記とは違い、苦しみを希望にかえるような文章を書いたのです。

山焼きで山を焼くのは、新しく芽吹く草木のためなのです。カントの哲学は、この世界の、物で虚しくしばられた苦しみを美しく燃焼させて、精神の美しさを表している・・・そんなイメージを持って、私はカントの純粋理性批判を読んでみました。

# 燃やし続けること

この世界は、苦しみから成り立っています。しかし、その苦しみを美しく燃やすことが、永遠をつくります。苦しみを燃やした炎の中に、永遠は存在するのです。
炎は、ゆれ動く不安定なものです。もちろん手でつかむこともできません。しかし、その中には、永遠があります。それは、苦しみを燃やし続けるという、情熱の炎です。私はこの、情熱の炎というものを軸に、命を燃やしつづける意義について、哲学してみようと思います。

私が哲学をする大きな目的は、心の支えを探すことです。実際に、今までに、これが支えと思うものに何回も出会いました。「支え」とは、人生の苦しい沼からつかむ、救いそのものだと思います。しかし、探し出した答えにすがって、そのあとの生を安楽に生きることはできませんでした。私は思うのです。人生は苦しみの沼であり、見つかった支えとは、沼を浮き輪で泳ぐためのものにすぎず、沼の苦を解決するものではなかったと。しかし、大切なのは、支えを探す努力そのものなのだと。支えを探そうとして、人は沼を自力で泳ぐ努力をするからです。自力で泳ぎ続けることは、命を燃やし続けることです。そのことこそが、最も強力な、生きるお守りなのです。私は、この真実を、カントの哲学の中から見つけることができました。そこで、この文章で、カントの純粋理性批判を軸に分析してみようと思います。

## 炎と、「考えること」

人生は、確かなものを簡単には作ることができず、常に大きなとげの上に乗っかっているかのようです。しかし、そのとげの先を、美しく燃焼させることで、安定した幸せ以上の、底から突き上げるような喜びを感じることができます。その喜びのために、痛みと向き合っていくのかもしれません。そして、もう一つうれしいことがあります。とげを燃焼させることで、大切なもの（宝物）をつくることができるのです。物を書く人には、創作物、音楽をする人には、素晴らしい演奏ができるのです。私は、哲学に限らず、どの分野にも、苦しみの燃焼が必要と思うのです。

カントは、「考えること」によって、その燃焼をした人だと思います。その燃焼を、私はカントの哲学の中から探してみました。すると、純粋理性批判の中の、「純粋理性の誤謬（『誤謬』とは、『間違った』という意味です。『ごびゅう』と読みます。）推論について」という場所に、その燃焼を見つけた気がしました。霊魂、心についての誤った解釈について分析しているところです。ここで、カントは、心（霊魂）を実体と考えることを批判しています。カントは、誤謬推論の分析において、「私は考える」という行為を基軸にしているのです。私達は、この世界において、確かな支えを作ろうとして生きています。そうしなければ、立っていることもおぼつかないでしょう。しかし、「実体」ではなく、「行為」に基軸を置いてみてはどうでしょうか。探し出した答え、支えに頼るのではなく、探し続けること、考え続ける行為を大切にするのです。そうすれば、この世界という、物の世界を燃焼させて、最も美しい精神の炎を得ることができるのではないでしょうか。考え続ける、創り続けることに重心をおけば、一つの創作に満足してこだわり続け、次のものを創れないということもなくなるかもしれません。

## 苦しみの中のお守り

人生が苦しくて仕方ないとき、おぼれてしまうほどに向き合いすぎず、しかし、抱えていく覚悟が必要です。逃げたいのに、逃げられない・・・それなら、苦しみを優しく包みこんで、お守りに変えてしまいましょう。それは、炎を正しく利用して暖をとることと同じです。苦しみに燃やしつくされない、上手な向き合い方があるのです。

それは、哲学では、「考える」「分析する」ことです。苦しみを分析することを、学問として成立させているのです。苦しみというものは、考え方一つで、真っ直ぐに生きていくための支柱になり、生きるお守りになるのです。そして、そのお守りは、実体ではなく、実体を分解する（燃やす）、つまり物事と向き合うことであるということが、カントの誤謬推論の分析で書かれていると、私はとらえてみたのです。

## 炎を哲学する

誤謬推論は、炎を燃やすための火種であると考えてみます。純粋理性批判では、「誤謬推論」のあとに、「アンチノミー（二律背反）」があります。これは、精神の世界へと飛翔しようとするときに起きる、矛盾です。「世界は有限か無限か」などの問題です。
有機物が燃えるとき、物は酸素と合成し、ほとんどが水と二酸化炭素になり、灰がでます。炎は、熱エネルギーによっておこる、気体分子の光です。アンチノミーは、矛盾であるのですが、精神の世界へ飛翔するための矛盾であり、火が燃えるときにおこる、エネルギーの差による、炎であると考えます。この矛盾と向き合って批判することで逆に足元を固め、永遠に手をのばすのがアンチノミーと言えると思います。炎は永遠を示すのですね。その足がかりとして、カントは誤謬推論によって、「実体」という、物の世界を燃やしたのではないでしょうか。炎という永遠は、「考え続ける（燃やし続ける）」という、行為そのものによって、維持されるのです。誤謬推論は、永遠の炎（アンチノミー）を維持させるために、用意されているのではないかと私は思ったのです。永遠と炎は、燃え続けることに意味があります。

## 創作について

人生は沼のようなものだと書きました。常に心は揺れ、確かなものをつかんでも、やはりそれにすがって生きることはできません。炎が永遠を秘めていると言っても、炎をつかめばやけどをしてしまいます。しかし、その炎と真剣に向き合う人には、炎の中から不死鳥を取り出すことができます。自ら炎の中に飛び込み、幼鳥となって生まれ変わる、あのフェニックスです。人がつくるフェニックスが、「創作物」と言えるのです。
しかし、創作のためには、炎の中で焼かれなければなりません。創作は、苦しみの中から生まれるのです。
心がグラグラしてすっきりしないことはないでしょうか。それはきっと、苦しみと喜びのはざまで心が揺れているのです。私は、そんな時に、自分でも予測不可能であったものが書けることがあります。創作は、ゆらゆら揺れる炎の中から誕生するものらしいのです。
カントの哲学も、二つのものの間の揺れから誕生していると思います。理性を信じる「独断論」と理性を疑う「懐疑論」、そして、感性界から叡智界への可能性を探る「純粋理性批判」と叡智界の可能性を道徳で書いた「実践理性批判」、そして、純粋理性批判、実践理性批判、判断力批判全てに貫かれる「アンチノミー」です。

二つのものの間の葛藤は、苦しみの沼からはいあがって陸にあがろうとする人間の本性を示しています。この葛藤はどうしても人生をドロドロしたものにしてしまい、それをいかに燃焼させることができるかということに、命を燃やし、人生を楽しめるかどうかがかかっているのです。そして、創作は、心の中の宝物を、「燃やす」ということで、外に出すことと言えるのです。

## 苦しみの意味

どうして炎を燃やすのでしょうか。それは、炎が、物のエネルギーを表す、物の本当の姿であるからだと思います。物の本当の姿（カントはこれを「物自体」と言っています。）を見るためには、このよどんだ世界の、物の仮の姿（カントはこれを「現象」と言っています。）を燃やさなければならないのです。物の本当の姿の中には、永遠がかくされています。しかし、その永遠をみるためには、苦しみの芯が貫いたろうそくが必要であり、決して苦しみにふたをして向き合うのをやめてはならないのです。苦しみをふさぐということは、心が「痛い」と言っているのに、感じないふりをすることです。それでは、永遠の炎を見ることもできず、人生の深さも味わえません。しかし、かと言って、向き合いすぎて苦しみの炎に燃やしつくされないようにしないといけなくて、人生はなかなか難しいものですね。しかし、上手に火を利用し、向き合うことを自分の人生の向上に結びつけられれば、人生はとても豊かなものです。上手に向き合うことができれば、自分に刺さったとげは、存在していても、逆に自分を守ってくれるお守りに進化しています。そんな人生の意味を、カントの哲学から読み取ることができました。